

コーパスに基づく『外来語言い換え提案』の評価

金田 拓

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

要 旨

近年、公共性の高い場面での言語使用で、外来語が氾濫しコミュニケーションの阻害をきたしているというのが指摘される。これを背景として、「外来語言い換え提案」が国立国語研究所「外来語」委員会によって、2003～2006年の間に176語の外来語について言いかえのための手引きが提示された。国立国語研究所「外来語」委員会(2006)によれば、公共性の高い印刷物での外来語の扱いには、少しずつ工夫の跡が見られるようになりました(p.3)とあるが、実際にデータに基づいて、言い換えを提案した語と、言い換え後の単語について実証研究がなされた例は未だ存在しないようである。本研究どのような特性を備えた外来語が言い換えに成功しているのか、コーパスに基づいたアプローチを試みる。

1. 研究の背景

近年、公共性の高い場面での言語使用で、外来語が氾濫しコミュニケーションの阻害をきたしているということが指摘される。外来語については、意識調査や個々の単語を挙げてその認知度を聞く世論調査がしばしば行われており(文化庁, 1995, 1997, 1998, 1999; 陣内, 1999, 2007), 単に外国語の氾濫を指摘するに留まらず、外来語がコミュニケーションに実際に疎外をきたす情報バリアとなっていることが示唆されてきた。コミュニケーション問題としての外来語の特徴は、量の多さ、多様さ、専門性などが指摘されている(陣内, 2007)。国立国語研究所「外来語」委員会(2006)では、1956年刊行の雑誌90種と1994年刊行の雑誌70種の語種の比率を比較し、約40年の間に外来語の比率が3.5倍に増加したことを明らかにしている他、読売新聞社による調査(2003)によれば、「あなたは普段の生活でカタカナ語が分からなくて困ることがありますか、ありませんか」という質問に対し、2003年時点で88%が困難を感じているという結果が報告されている。

このような背景を受け、外来語は既に日常生活を営む上で必要とされる情報のやり取りや意思疎通に支障を生じる要因であるとして、2002年より国立国語研究所に外来語委員会が設けられた。委員会が設立された主目的は、社会に氾濫する外来語を検討し、必要に応じて言い換え語を提案するという試み、「外来語言い換え提案」のためである。公共性の高い場面で一般に理解困難な外来語が使われていれば、それに代わるべき分かりやすい

表現はどのようなものがあるか検討し、目安やよりどころを具体的に提案しようという試みである。

国立国語研究所「外来語」委員会（2006）によれば、対象としたのは「公共性の高い文章で使われている分かりにくい外来語」であり、提案を重ねるうちに「……公共性の高い印刷物での外来語の扱いには、少しずつ工夫のあとが見られるようになりました。」（p. 3）とあるが、外来語の選定基準、対象とされた外来語にはどのようなものが含まれるか、及び言い換え提案の評価を、言語運用の観点から実データを用いて検証した例は未だ存在しないようである。本研究は、言語運用の集積たるコーパスを用いることで、言い換え対象となった外来語にはどのようなものが含まれるか、現実の言語運用での使用実態はどうかを調査し、言い換え提案の評価を試みる。加えて言い換え表現に着目し、言い換え表現が日本語として定着するかについて、背景にある因子の特定が可能であるか、重回帰分析を用いて調査する。

2. 研究の目的とその方法

一般に外来語を論じる場合、中国由来の漢語と他言語を起源とするもの、それに和語・漢語・外来語のうち2種類以上が組み合わさった混種語に分類されることが多いが、本研究の調査対象とした「外来語」は、国立国語研究所「外来語」委員会（2006）の言い換え対象となった176語である（以下、「調査語」）。調査語にはそれぞれ、「言い換え語」「その他の言い換え語例」（以下、「言い換え表現」）が付与されており、手引き並びに意味説明と共に、外来語が何を意味するのかが示されている（例：調査語「アーカイブ」に対する言い換え語「保存記録」、調査語「アイデンティティ」に対する言い換え語「自己認識」）。本研究が扱うのはこの調査語と言い換え表現の組み合わせである。

2.1. 目的変数：言い換え表現の定着度

言語運用の観点から言い換え提案を評価する場合、言い換え表現がどの程度使用されているか、「定着度」を測定する必要がある。過去、定着度の評価は専ら質問紙調査やインタビューによって行われてきた（国立国語研究所「外来語」委員会, 2006; 讀賣新聞, 2003）。質問紙やインタビューによる調査は、個人を単位として綿密な研究が可能という利点が存在するが、一方で言語運用を反映するデータとしては不明な点が残るのもまた否定できない事実である。そこで本研究では、言語運用を調査するのに現実の言語使用を集めて作成されたコーパスを用いることにした。即ち、コーパス内で高頻度であれば、その表現はより定着しており、低頻度、あるいは発見されなければ表現は定着していないという考えである。

ただし問題点として、言い換え表現の中には既存の表現に融和させる形式を取っているものと、該当する概念に合わせるべく作成された造語が混在しているという点について論じなければならない。前者の例は「図書館」（ライブラリー）や「衝撃」（インパクト）などで、後者は「停車時エンジン停止」（アイドリングストップ）や「納得診療」（インフォー

ムドコンセント)などが具体例として挙げられる。これら2種類を同列に扱うことは研究の内的妥当性を損なうことが懸念されたが、本研究では言い換え表現全てを対象とした総合評価を行うべく、両方を等しく含めることとした。

コーパスを用いて頻度を求める場合、望ましいのは現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)のような均衡コーパスを利用することであると思われた。しかし、本研究が目的とする「外来語言い換え提案の評価」という目的に照らし合わせた場合、BCCWJでは代表性が問題となることが判明した。BCCWJは、「2001～2005年に出版されたすべての書籍及び東京都内の公共図書館で所蔵している書籍」を代表するコーパスであるため(Maekawa, 2008)、2003～2006年に継続して行われた「外来語言い換え提案」を評価する資料としては、残念ながら時系列的に適當でないこととなる。

従って本研究では、言い換え提案が完了した2006年以降に作成されたコーパスとして、Tomaž ErjavecがWWWから構築した約4億語の日本語ウェブコーパスJpWAC(Sketch Engine®上で公開)を利用した。JpWACはBaroni(2006)に基づいて作成されたコーパスであり、高頻度の一般的な内容語500語の組み合わせから5000～6000の検索リストを生成。Google®が返す上位10種のURLページを自動ダウンロードしてコーパス化したものである(Erjavec, Erjavec, & Kilgariff, 2008)。参照コーパスとしてのBCCWJと、複数のウェブコーパスを語彙頻度の観点から比較した石川(2009)によれば、BCCWJとJpWaCは非常に高い相関を示し($r=0.97$)、有力な日本語研究資料となることが証明されている。広範な言語使用を含むJpWaCを利用することは、言い換え表現が人口に膾炙しているかどうか調査する手段として妥当であろう。

また、言い換え表現の頻度を抽出するにあたり、語彙の多義性が問題となった。例えば「ネグレクト」という調査語に対し、言い換え手引きでは「育児放棄」「無視」「介護放棄」「世話の放棄」という言い換え表現の例を提示している。言語の多義性を考慮すれば、調査対象である「ネグレクト」の出現全てを意味分類し、割合を調査したうえで言い換え表現それぞれと対応させることが理想であるが、本研究では言い換え語の「第一義」に対象を限定することとした。国立国語研究所「外来語」委員会(2006)の方針はあくまで、第一義を含めて言い換え表現は「例」であり、状況と場面に応じて適宜柔軟に対応しているため、全てを分類し調査することは実質不可能に近い。しかし、言い換えの評価を行うためには、対応する表現を決定しなくてはならないため、「見出しの外来語を言い換えるのに最も適当だと考えられる言葉」であり「最適の1語に絞り込んだ言葉」(p. 31)と定義されている第一義を採用した。

2.2. 説明変数

言い換え表現の定着度に付随する特徴を明らかにし、定着度の予測を行うべく以下の説明変数を採用した。

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. JpWaC における調査語の頻度 | (e.g. セカンドオピニオン) |
| 2. British National Corpus における調査語の頻度 | (e.g. second opinion) |
| 3. 単語長 | (e.g. 「第二診断」(4 字)) |
| 4. 調査語の認知率 | |
| 5. 調査語の理解率 | |
| 6. 調査語の使用率 | |

「1. JpWaC での外来語の頻度」は、JpWaC 内における調査語の頻度である。この項目は、元となる外来語の頻度による影響を調査するもので、調査語が高頻度であり既に日本語に定着している場合と、限定的な場合とで言い換え表現の使用に差があるかを調査する目的で加えられた。

「2. BNC 内での外来語の頻度」は、イギリス英語汎用コーパスである British National Corpus (BNC) 内での調査語の頻度を求めた値である。言い換え対象となった外来語は極少数の例外を除いて、全て英語由来の単語から構成されているが、中には「アイドリングストップ」「ノンステップバス」などのようないわゆる「和製英語」や、他言語由来の単語（「ビオトープ」「コミュニケ」など）が混在している。調査語が外来語であるという側面を鑑み、原語でどのような性質をもつかを反映させる目的で投入した。

「3. 単語長」は、言い換え表現が何文字で構成されるかである。単語長は様々な語彙研究で使用されている実績があるため (Baayen, 2008; Johnson, 2008)、本研究では一般語と専門用語の区別のために導入した。即ち、より一般的な語は、専門的な語に比べて比較的短い場合が多くなるためである。野村 (2004) によれば、第 2 回目までの調査語 109 語に対して、言い換え表現の語種を分類すると 4 字以上からなる表現が多いが、長い言い換え表現は言い換えとしてあまり意味を持たないとしているため、分析に組み込む有用性があると判断した。

4～6 に挙げた「調査語の認知率・理解率・使用率」は、外来語がどの程度国民に定着しているかをインタビュー調査した外来語定着度調査に拠るものである (文化庁, 2003)。認知率は「該当単語を見聞きしたことがある」、理解率は「該当単語の意味がわかる」、使用率は「該当単語を使用したことがある」とインタビュー中で答えた人の割合である。中でも調査結果「理解率」は、「外来語」言い換え提案にて、個々の外来語の分かりにくさの程度を知る目安として既に利用されており (ただし理解率が言い換え提案にてどのような役割を果たしたのかは明記されておらず、国立国語研究所「外来語」委員会 (2006) では単語とともに数値が報告されるにとどまっている)、評価に組み込むことにした。

2.3. 分析手法

はじめに調査語と対応する言い換え表現がどのような特徴を備えるか記述統計を概観し、各説明変数について相関分析を行った。加えて、言い換え表現の定着度 (頻度) を目的変数とし、2.2 節で触れた 6 指標を用いて、重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。

3. 結果と考察

3.1. 調査語及び言い換え表現の特徴

表1は、本研究で調査した言い換え表現、及び説明変数の記述統計量である。一見してまず気付くのは、調査語及び言い換え表現には多様なものが含まれていることである。目的変数および説明変数を見ても、何らかの基準を満たした語を網羅的に対象としたというより、幅広い語を対象としたのではないだろうか。根拠として、非常に低頻度な調査語（「住民参画」（パブリックインボルブメント, JpWaC 中7例）, 「特注生産」（カスタムメイド, JpWaC 中8例））や、理解率・使用率の非常に高い単語（「衝撃」（インパクト, 理解率=75.1%）, 「障壁なし」（バリアフリー, 理解率=72.7%））など、決して理解を阻害する外来語として言い換えるべき優先度が高いとはいえない単語が含まれていることが挙げられる。

表1 分析対象とした言い換え表現及び説明変数の記述統計（N=176）

	最小値	最大値	平均	標準偏差
JpWaC 内の言い換え表現の頻度	0	80757	4192.52	11766.39
JpWaC 内の調査語の頻度	7	51659	2112.73	5004.74
BNC 内の調査語の頻度	0	27337	2811.53	5030.43
単語長	1	9	3.79	1.36
調査語の認知率（%）	6.1	90.7	43.94	25.22
調査語の理解率（%）	3	77.2	27.16	19.85
調査語の使用率（%）	0.5	66.6	17.2	15.26

ただし全体としては、やはり認知率・理解率・使用率の低い語が調査語となっているといえるだろう。理解率の平均値は27.16%と、国民のうち4人に1人が理解している程度であり、コミュニケーションが阻害されているというのも十分に頷ける値である。

言い換え表現についても同様に、既存の高頻度語に融和する形で言い換える場合（「発表」（プレゼンテーション））と、新たな表現をもって言い換える場合（「停車時エンジン停止」（アイドリングストップ））の両方が観察されるのが興味深い。前者と後者の差は、コーパス内での頻度調査によって初めて可視化されたといえるだろう。この言い換え表現については、以下3.2節で質的に取り上げた。

3.2. 言い換え表現の生起例

本節では、JpWaC内で観察された言い換え表現を数例取り上げ、質的に分析する。

3.1節で言及したように、言い換え表現は以下2種類に分けられる

1. 汎用的な高頻度語を言い換え表現にあてた場合（e.g.「発表」（プレゼンテーション））
2. 新たな表現を作成し言い換え表現にあてた場合（e.g.「等生化」（ノーマライゼーション））

注目すべきは2の新たな表現を作成した場合だろう。新たな表現を用いた場合、高頻度語をそのままあてたものに比べて頻度は非常に低くなるが、それでもコーパス中では何件かの使用が確認されている。例えば調査語「インセンティブ」に対しての言い換え表現「意欲刺激」は3件が確認されているが、その内訳は1件が「インセンティブ」と置換不可能である使用、2件が「言い換え提案」に対する議論中でのメタ的使用であった。

- (a) 最近は購買意欲刺激のために豪華付録を付けるから雑誌に紐がかかっちゃってねえ。
- (b) 「インセンティブ」の言い換えの「意欲刺激」は一般からの提案でした
- (c) インセンティブ（意欲刺激）10.4%物事に取り組む意欲を報酬を期待させて外側から高める働きの中で、内面から高める「モチベーション」（動機付け）と区別しました。

(a) は通常使用で、調査語の「ものごとに取り組む意欲を（報酬などで）外側から高める働き」という意味からは逸脱していないが、「購買意欲刺激」という連語の一部としての使用であり、言い換え表現の浸透例としては不明瞭である。一方で (b) 及び (c) 「外来語言い換え提案」を議論した例であり、言い換え表現をメタ的に議論する中での使用であるため、定着例とはいえないだろう。このように言い換え表現が非常に低頻度である場合、それはメタ的使用であり定着しているとはいえないだろう。

一方で低頻度でもある程度の頻度（10～）がある場合、一般的な使用をコーパス中に見ることができる。以下 (d) は「納得診療」（インフォームド・コンセント）の例である：

- (d) この企画は、インフォームド・コンセント（納得診療）に明るい、大阪府立成人病センター参事の中島弘先生を中心に企画されたものです。

(d) の例では、本来の調査語に添えられる形で言い換え表現が使用されているため、完全に定着した例としては疑問が残るが、社会の中で使用され始めている好例だと言えるだろう。実際に「納得診療」の生起例27件を観察すると、その多くは前述のメタ的な使用であるが、言い換えの結果生まれた造語であっても、社会に定着していく萌芽をみることができる。

3.3. 重回帰分析による、回帰モデルの作成

表2は今回の研究で使用した各指標の相関行列をまとめたものである。目的変数である言い換え表現との相関を確認すると、調査語の頻度を除く各指標と弱い相関（ $r=-0.242\sim 0.381, p<.01$ ）が確認された。調査語と言い換え表現の頻度が無相関だったことから、言い換え表現の中には定着しやすいものとしにくいものがあることが推察される（全ての語が一定割合で言い換えられる場合、相関があることが予測される）。

また、意外なことに全ての変数と相関していたのがBNC内の調査語の頻度で、弱い相関（ $r=-.223\sim .322$ ）が見られた。英語内で高頻度な表現ほど、外来語としても日本語内でよく知られ、理解され、使用される傾向にあるというのは興味深い発見だろう。

表2 変数間の相関行列

	1	2	3	4	5	6	7
1. JpWaC 内の言い換え表現の頻度	—						
2. JpWaC 内の調査語の頻度	.119	—					
3. BNC 内の調査語の頻度	.210**	.322**	—				
4. 単語長	-.242**	-.420**	-.223**	—			
5. 調査語の認知率 (%)	.350**	.119	.286**	-.140	—		
6. 調査語の理解率 (%)	.355**	.134	.285**	-.142	.958**	—	
7. 調査語の使用率 (%)	.381**	.152*	.322**	-.198**	.910**	.977**	—

次に重回帰分析を行うにあたり、注意しなければならないのが説明変数同士の相関である。表2を見ると、5～7の調査語の認知率、理解率、使用率の3要因が、互いに $r=.91 \sim .977$ と非常に強い相関を示している。この3項目に関して分散拡大要因(VIF)を計算したところ、認知率 15.73、理解率 63.8、使用率 32.18 と、3つとも値が10を超えており、また許容度も0.20以下であったため、多重共線性が生じていると判断した(Field, 2009)。このため、これら3項目はモデル構築の際に認知率を代表変数として採用し、残る2項目は除外することにした。理解率を採用したのは、元となる外来語言い換え提案が、理解率に基づいて行われているためである。

表3 JpWaC 内の言い換え表現の頻度を目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)の結果

	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	回帰係数	標準偏差誤差	β		
切片	14475.405	2810.330		5.151	.000
JpWaC 内の調査語の頻度	-.067	.173	-.028	-.387	.699
BNC 内の調査語の頻度	.557	.167	.238	3.327	.001
単語長	-3195.271	606.000	-.371	-5.273	.000
調査語の認知率 (%)	14.142	43.678	.024	.324	.747
調整済み R^2	.214				
F 値	12.911 ($p < .01$)				

表3は、言い換え表現の頻度を目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)の結果である。言い換え表現の予測頻度を求める回帰式の回帰係数として、調査語の頻度、英単語頻度、単語長、理解率が検証された。つまり、外来語言い換え提案における言い換え表現の予測頻度は、以下の式で求めることができる。

JpWaC 内の言い換え表現の頻度

$=14475.405 + 0.557 \times \text{BNC 内の調査語の頻度} - 3195.271 \times \text{単語長}$

回帰モデルの適合度を検定した分散分析の結果、 $F(4, 171)=12.88, p<.01$ であり、回帰モデルの適合度は有意であった。作成したモデルの説明力は $R^2=0.232$, 調整済み R^2 が $R^2=0.214$ と、説明できたのは全データの 20% 強に留まったが、この重回帰式は予測に役立つ意味のあるものであるといえる。以下では有意となった独立変数について考察する。

単語長の係数がマイナスであるということは、より言い換え表現がより短いものほど、頻度はより高くなるという意味である。野村 (2004) は外来語言い換え表現を分析し、4 字以上からなる漢語と混種語が多く、連語的性格を帯びた長い言い換え表現はあまり意味がないと指摘しているが、果たして今回の分析でも同様の結果が表れたことになる。造語を言い換え表現にあてた例を取り上げると、「納得診療」(インフォームドコンセント) や「排出ゼロ」(ゼロエミッション) が JpWaC 内でそれぞれ 27 件、11 件確認されたのに対し、「停車時エンジン停止」(アイドリングストップ) や「自由勤務時間制」(フレックスタイム) は各 1 件と、やはり差が確認された。言い換え表現の中には「会議」(コンファレンス)、「発表」(リリース) など、単語長の短い、非常に高頻度な語をもって言い換えた例が散見され、これが結果に影響していることが考えられるが、上述のような例も同時に見られるため外れ値とみなすのが妥当だろう。外来語が多用される一因として、概念を句の形で表すより、単語として使用の方が便利であるという点が指摘されているが (野村, 2004), それを鑑みれば言い換え表現も短い方が広まりやすいというのは理に叶っているといえる。

対して、英単語頻度の係数がプラスであったことは、「英語で」高頻度な語ほど、言い換え表現も広く使用されるということである。例として今回の調査語の中では、care (ケア, 手当), community (コミュニティ, 地域社会), management (マネージメント, 経営管理) などが BNC 中で高頻度であった。高頻度な単語は概念そのものが高頻度であり、結果言い換え表現の多用につながっている可能性が考えられる。

ただし今回の重回帰モデルに含まれなかった項目も、実質的に無価値ということはない。ほぼ全ての説明変数目的変数との間に単相関がみられたことがそれを証明している。ステップワイズ法を用いた重回帰分析では最もよく目的変数を説明する変数を選択し、それ以外の説明変数は相関が強いものでもモデルに組み込まれないということが起こるので、その他の説明変数が何故組み込まれなかったかということを重回帰分析で知ることとはできないということを留意する必要がある (前田, 2004)。回帰モデルを作成する際には、「相関の低い説明変数でも加えてみると、示唆に富んだ結果が得られる可能性がある」(水本, 2008) ということが指摘されているので、今後モデルを再検証・改善する際にも組みこんでいく価値があるといえるだろう。

4. 研究の限界点と今後の展望

留意しなければならない点として、本研究が用いたコーパスに基づく分析では、言い換

え表現が本来外来語だった単語が言い換えられて出現したのか、もしくは最初から言い換え語だったのかということを調査することができない。ただし言い換え表現も、全く日本語に存在しない表現を当てているわけではないため、生起した言い換え表現から言い換えられた割合を求めることは実質的に不可能である。この問題を克服するには、2006年以降の資料を集積して通時的コーパスを作成し、時系列的な調査を行うことが必要となるだろう。即ち2006年以降、調査語と言い換え表現を比較して、言い換え表現の頻度が相対的に増加していれば、より正確な言い換え表現の定着とみなすことができるのではないか。

また、モデルの説明力の低さも課題である。重回帰分析によるモデルの作成自体は成功したが、説明力は $R^2=0.232$ 、調整済み R^2 は $R^2=0.214$ であった。この結果が意味するのは、統計的モデルの作成自体には意義があるが、説明変数としてより多様なものを加える必要性があるということである。例えば政治経済・医療福祉・ITなどの分野で使用される外来語は、分かりにくく困った経験があるとの調査結果が発表されており（国立国語研究所「外来語」委員会, 2006）、言い換え表現が実際に使用されるかに影響があることが考えられるだろう。外来語に関して本研究のように統計的予測を試みた研究はあまり試みがないため、様々な要因をモデルに含めて検証していく必要があるだろう。

5. 結論

本研究では、「外来語言い換え提案」の調査語と言い換え表現がどのような性質を持っているかをコーパスに基づき明らかにした上で、重回帰分析によって言い換え表現の定着度を予測する回帰式を作成し、モデルを検証した。定着度とは単語長、英単語頻度、調査語の認知率・理解率・使用率について相関が確認されたが、重回帰分析によるモデルには単語長と英単語頻度のみが含まれ、全体の21%が予測できたに留まった。説明力は限定的でありモデルとしての問題は残るが、研究の結果から、各種語彙特性を組み合わせで定着度を予測することは、可能であることが明らかとなったといえよう。今後の研究では、普及率を時系列的に追うことのできる通時コーパスを用いた研究、並びに変数を加えた言い換え表現予測モデルの改善が望まれる。

参考文献

- Baayen, R. H. (2008) *Analyzing linguistic data: A practical introduction to statistics using R*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Baroni, M., & Bernardini, S. (2006) Wacky! Working Papers on the Web as Corpus
- Erjavec, I., Erjavec, T., & Kilgariff, A. (2008) A web corpus and word sketches for Japanese. *Information and Media Technologies*, 3 (3), 529-551.
- Field, A. P. (2009) *Discovering statistics using SPSS: (and sex and drugs and rock'n'roll)*. London: SAGE publications.
- Johnson, K. (2008) *Quantitative methods in linguistics*. Malden, MA: Blackwell Publishing.

- Maekawa, K. (2008) *Balanced corpus of contemporary written Japanese*. Paper presented at the International Joint Conference on Natural Language: The 6th Workshop on Asian Language Resources, Hyderabad, India.
- 国立国語研究所「外来語」委員会（2006）『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』。東京：ぎょうせい。
- 石川慎一郎（2009）『日本語基本語研究における非統制型・統制型・媒介型 Web as Corpus の可能性—言語コーパスにおける基本語頻度の安定性について—』。Paper presented at the 特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度公開ワークショップサテライトセッション予稿集』。 http://language.sakura.ne.jp/s/ila/ishikawa_20090314.pdf
- 陣内正敬（1999）『「役所カタカナ語」意識調査』：科学研究費補助金研究成果報告書。
- 文化庁（1995）『国語に関する世論調査 平成 7 年 4 月調査』。東京：大蔵省印刷局。
- 文化庁（1997）『国語に関する世論調査 平成 9 年 1 月調査』。東京：大蔵省印刷局。
- 文化庁（1998）『国語に関する世論調査 平成 9 年 12 月調査』。東京：大蔵省印刷局。
- 文化庁（1999）『国語に関する世論調査 平成 11 年 1 月調査』。東京：大蔵省印刷局。
- 文化庁（2003）『日本人の国語力—世論調査報告書 平成 14 年度 国語に関する世論調査』。東京。
- 野村雅昭（2004）漢字に未来はあるか。In 前田富祺&野村雅昭（Eds.），『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』（pp. 221-240）。東京：朝倉書店。
- 水本篤（2008）自由英作文における語彙の統計指標と評定者の総合的評価との関係。In 石川慎一郎（Ed.），『統計数理研究所共同研究リポート 215』。東京：統計数理研究所。
- 読賣新聞（2003）「カタカナ語多過ぎ」8 割超，『読賣新聞』，p. 27。

別表 本研究で使⽤した「調査語」「言い換え表現」一覧

ID	調査語	言い換え表現	ID	調査語	言い換え表現
1	アーカイブ	保存記録	34	カウンターパート	対応相手
2	アイデンティティ	⾃⼰認識	35	カスタムメイド	特注生産
3	アイドリングストップ	停車時エンジン 停止	36	ガバナンス	統治
4	アウトソーシング	外部委託	37	キャッチアップ	追い上げ
5	アカウンタビリティ	説明責任	38	キャピタルゲイン	資産益
6	アクションプログラム	実行計画	39	クライアント	顧客
7	アクセシビリティ	利用しやすさ	40	グランドデザイン	全体構想
8	アクセス	接続	41	グローバリゼーション	地球規模化
9	アジェンダ	検討課題	42	グローバル	地球規模
10	アセスメント	影響評価	43	ケア	⼿当
11	アナリスト	分析家	44	ケーススタディ	事例研究
12	アミューズメント	娯楽	45	コア	中核
13	アメニティ	快適環境	46	コージェネレーション	熱電供給
14	イニシアチブ	主導	47	コミット	かかわる
15	イノベーション	技術革新	48	コミットメント	関与
16	インキュベーション	起業支援	49	コミュニケ	共同声明
17	インサイダー	内部関係者	50	コミュニティ	地域社会
18	インセンティブ	意欲刺激	51	コラボレーション	共同制作
19	インターンシップ	就業体験	52	コンセプト	基本概念
20	インタラクティブ	双方向的	53	コンセンサス	合意
21	インパクト	衝撃	54	コンソーシアム	共同事業体
22	インフォームド・コン セント	納得診療	55	コンテンツ	情報内容
23	インフラ	社会基盤	56	コンファレンス	会議
24	エンパワーメント	能力開花	57	コンプライアンス	法令順守
25	エンフォースメント	法執行	58	コンポスト	たい肥
26	オーガナイザー	まとめ役	59	サーベイランス	監視調査
27	オーナーシップ	所有権	60	サプライサイド	供給側
28	オピニオンリーダー	世論形成者	61	サプリメント	栄養補助食品
29	オブザーバー	陪席者	62	サマリー	要約
30	オフサイトセンター	原子力防災セン ター	63	サムターン	内鍵つまみ
31	オペレーション	公開市場操作	64	シーズ	種
32	オンデマンド	注文対応	65	シェア	占有率
33	ガイドライン	指針	66	シフト	移行
			67	シミュレーション	模擬実験
			68	シンクタンク	政策研究機関

ID	調査語	言い換え表現	ID	調査語	言い換え表現
69	スキーム	計画	105	ノンステップバス	無段差バス
70	スキル	技能	106	バーチャル	仮想
71	スクーリング	登校授業	107	パートナーシップ	協力関係
72	スクリーニング	ふるい分け	108	ハーモナイゼーション	協調
73	スケールメリット	規模効果	109	バイオテクノロジー	生命工学
74	スタンス	立場	110	バイオマス	生物由来資源
75	ステレオタイプ	紋切り型	111	ハイブリッド	複合型
76	ストックヤード	一時保管所	112	ハザードマップ	災害予測地図
77	セーフガード	緊急輸入制限	113	バックアップ	支援
78	セーフティネット	安全網	114	バックオフィス	事務管理部門
79	セカンドオピニオン	第二診断	115	パブリック・インボル ブメント	住民参画
80	セキュリティー	安全	116	パブリック・コメント	意見公募
81	セクター	部門	117	バリアフリー	障壁なし
82	セットバック	壁面後退	118	ヒートアイランド	都市高温化
83	ゼロエミッション	排出ゼロ	119	ビオトープ	生物生息空間
84	センサス	全数調査	120	ビジョン	展望
85	ソフトランディング	軟着陸	121	フィルタリング	選別
86	ソリューション	問題解決	122	フェローシップ	研究奨学金
87	タイムラグ	時間差	123	フォローアップ	追跡調査
88	タスク	作業課題	124	プライオリティー	優先順位
89	タスクフォース	特別作業班	125	フリーランス	自由契約
90	ダンピング	不当廉売	126	ブレイクスルー	突破
91	ツール	道具	127	フレームワーク	枠組み
92	デイサービス	日帰り介護	128	プレゼンス	存在感
93	デジタルディバイド	情報格差	129	プレゼンテーション	発表
94	デフォルト	債務不履行	130	フレックスタイム	自由勤務時間制
95	デポジット	預かり金	131	プロトタイプ	原型
96	デリバリー	配達	132	フロンティア	新分野
97	ドクトリン	原則	133	ベンチャー	新興企業
98	ドナー	臓器提供者	134	ボーダーレス	無境界
99	トラウマ	心の傷	135	ポートフォリオ	資産構成
100	トレーサビリティ	履歴管理	136	ポジティブ	積極的
101	トレンド	傾向	137	ポテンシャル	潜在能力
102	ナノテクノロジー	超微細技術	138	ボトルネック	支障
103	ネグレクト	育児放棄	139	マーケティング	市場戦略
104	ノーマライゼーション	等生化			

ID	調査語	言い換え表現	ID	調査語	言い換え表現
140	マクロ	巨視的	159	ライブラリー	図書館
141	マスタープラン	基本計画	160	リアルタイム	即時
142	マネージメント	経営管理	161	リードタイム	事前所要時間
143	マルチメディア	複合媒体	162	リーフレット	ちらし
144	マンパワー	人的資源	163	リターナブル	回収再使用
145	ミスマッチ	不釣り合い	164	リデュース	ごみ発生抑制
146	ミッション	使節団	165	リテラシー	読み書き能力
147	メディカルチェック	医学的調査	166	リニューアル	刷新
148	メンタルヘルス	心の健康	167	リバウンド	揺り戻し
149	モータリゼーション	車社会化	168	リユース	再使用
150	モチベーション	動機付け	169	リリース	発表
151	モニタリング	継続監視	170	レシピエント	移植患者
152	モビリティ	移動性	171	ロードプライシング	道路課金
153	モラトリアム	猶予	172	ログイン	接続開始
154	モラルハザード	倫理崩壊	173	ワーキンググループ	作業部会
155	ユニバーサルサービス	全国一律サービス	174	ワークシェアリング	仕事の分かち合い
156	ユニバーサルデザイン	万人向け設計	175	ワークショップ	研究集会
157	ライフサイクル	生涯過程	176	ワンストップ	一箇所
158	ライフライン	生活線			